

呉越国における阿育王塔の造塔と信仰について

瀧朝子（大和文華館）

阿育王が造らせたとする八万四千基の舍利塔は、中国各地に伝承が残されているが、そのなかで、明州（現在の寧波）鄞県の阿育王塔は江南の地で篤い信仰を集め、特に五代の呉越国が治める領土にあった時には、数度に渡り、杭州に迎えられて礼拝されている。この鄞県阿育王塔の形状については鑑真が実見しており、『鑑真和上東征伝』には塔に本生図を表わすと記述されている。呉越国王の銭弘俶は少なくとも二度、この鄞県阿育王塔を写したと考えられる本生図を表した銅製・鉄製の小型の塔を大量に造らせて頒布しており、これ以降、江南では同様の形状をした大小の塔が盛んに作られるようになる。

これまでの研究は銭弘俶の造塔事例が銭弘俶塔として特化されることが多く、特徴的な形状や本生図の内容の考察、また、鄞県阿育王塔の形状を想定しつつ、本生図の持つ西アジア的要素からその特性が考察されてきた。さらに近年では、呉越国が宋に降る際に鄞県阿育王塔を北宋の宮廷内に納めている経緯が詳かにされ、王権や皇帝の治国と関連付けられている。

本発表では、呉越及びそれ以降において鄞県阿育王塔の信仰がどのように行われたのか、現存作例及び文献から明らかにすることを試みる。銭弘俶塔及びこれに類した形状の阿育王塔が仏塔などの同所からともに発見されている例があり、銭弘俶の二度に渡る阿育王塔造塔が信仰の篤い地域に与えた影響は大きかったことは想像に難くない。また、呉越国の高僧であった賛寧は鄞県阿育王塔を北宋の都汴京で皇帝に献じた人物で、塔にまつわる説話を記してもいる。これらの内容や碑文を用いて呉越国における阿育王塔にまつわる信仰について考察を進める。また、銭弘俶は阿育王塔信仰を含めて数々の宗教的な事績を行っているが、これらは建国の王である銭鏐と傾向が近く、銭鏐の事蹟を踏襲しようとした点を検証する。

銭弘俶のほか、呉越国を中心にした江南においては、王や皇帝などの治世者ではない一般の信徒が単独や集団で銭弘俶塔と同型の阿育王塔を盛んに製作するようになった状況について、単なる形の流行ではなく、鄞県阿育王塔の模造（摸作）の観点から考察を行い、形を写すことにより、舍利塔の持つ聖性を写そうとした点について述べたい。